神神の微笑

芥川龍之介

ある春の夕（ゆうべ）、Padre Organtino はたった一人、長いアビト（法衣（ほうえ））の裾（すそ）を引きながら、南蛮寺（なんばんじ）の庭を歩いていた。

庭には松や檜（ひのき）の間（あいだ）に、薔薇（ばら）だの、橄欖（かんらん）だの、月桂（げっけい）だの、西洋の植物が植えてあった。殊に咲き始めた薔薇の花は、木々を幽（かす）かにする夕明（ゆうあか）りの中に、薄甘い匂（におい）を漂わせていた。それはこの庭の静寂に、何か日本（にほん）とは思われない、不可思議な魅力（みりょく）を添えるようだった。

オルガンティノは寂しそうに、砂の赤い小径（こみち）を歩きながら、ぼんやり追憶に耽っていた。羅馬（ロオマ）の大本山（だいほんざん）、リスポアの港、羅面琴（ラベイカ）の音（ね）、巴旦杏（はたんきょう）の味、「御主（おんあるじ）、わ

がアニマ（霊魂）の鏡」の歌——そう云う思い出はいつのまにか、この紅毛の沙門の心へ、懐郷の悲しみを運んで来た。彼はその悲しみを払うために、そっと泥烏須（神）の御名を唱えた。が、悲しみは消えないばかりか、前よりは一層彼の胸へ、重苦しい空気を拡げ出した。

「この国の風景は美しい——。」

オルガンティノは反省した。

「この国の風景は美しい。気候もまず温和である。土人は、——あの黄面の小人よりも、まだしも黒ん坊がましかも知れない。しかしこれも大体の気質は、親し

み易いところがある。のみならず信徒も近頃では、何万かを数えるほどになった。現にこの首府のまん中にも、こう云う寺院が聳(そび)えている。して見ればここに住んでいるのは、たとい愉快ではないにしても、不快にはならない筈ではないか？　が、自分はどうかすると、憂鬱の底に沈む事がある。リスポアの市(まち)へ帰りたい、この国を去りたいと思う事がある。これは懐郷の悲しみだけであろうか？　いや、自分はリスポアでなくとも、この国を去る事が出来さえすれば、どんな土地へでも行きたいと思う。支那(しな)でも、沙室(シャム)でも、印度(インド)でも、――つまり懐郷の悲しみは、自分の憂鬱の全部ではな

い。自分はただこの国から、一日も早く逃れたい気がする。しかし——しかしこの国の風景は美しい。気候もまず温和である。……」

オルガンティノは吐息をした。この時偶然彼の眼は、点々と木かげの苔に落ちた、仄白い桜の花を捉えた。桜！　オルガンティノは驚いたように、薄暗い木立ちの間を見つめた。そこには四五本の棕櫚の中に、枝を垂らした糸桜が一本、夢のように花を煙らせていた。

「御主守らせ給え！」

オルガンティノは一瞬間、降魔の十字を切ろうとした。実際その瞬間彼の眼には、この夕闇に咲いた

枝垂桜（しだれざくら）が、それほど無気味（ぶきみ）に見えたのだった。無気味に、——と云うよりもむしろこの桜が、何故（なぜ）か彼を不安にする、日本そのもののように見えたのだった。が、彼は刹那（せつな）の後（のち）、それが不思議でも何でもない、ただの桜だった事を発見すると、恥しそうに苦笑しながら、静かにまたもと来た小径へ、力のない歩みを返して行った。

×

×　　×

三十分の後（のち）、彼は南蛮寺（なんばんじ）の内陣（ないじん）に、泥烏須（デウス）へ祈禱を捧げていた。そこにはただ円天井（まるてんじょう）から吊るされたランプがあるだけだった。そのランプの光の中に、内陣を囲んだフレスコの壁には、サン・ミグエルが地獄の悪魔と、モオゼの屍骸（しがい）を争っていた。が、勇ましい大天使は勿論、吼（たけ）り立った悪魔さえも、今夜は朧（おぼろ）げな光の加減か、妙にふだんよりは優美に見えた。それはまた事によると、祭壇の前に捧げられた、水々（みずみず）しい薔薇（ばら）や金雀花（えにしだ）が、匂っているせいかも知れなかった。彼はその祭壇の後（うしろ）に、じっと頭を垂れたまま、熱心にこう云う祈禱を凝らした。

「南無大慈大悲の泥烏須如来！　私はリスポアを船出した時から、一命はあなたに奉って居ります。ですから、どんな難儀に遇っても、十字架の御威光を輝かせるためには、一歩も怯まずに進んで参りました。これは勿論私一人の、能くする所ではございません。皆天地の御主、あなたの御恵でございます。が、この日本に住んでいる内に、私はおいおい私の使命が、どのくらい難いかを知り始めました。この国には山にも森にも、あるいは家々の並んだ町にも、何か不思議な力が潜んで居ります。そうしてそれが冥々の中に、私の使命を妨げて居ります。さもなければ私はこの頃

のように、何の理由もない憂鬱の底へ、沈んでしまう筈はございますまい。ではその力とは何であるか、それは私にはわかりません。が、とにかくその力は、ちょうど地下の泉のように、この国全体へ行き渡って居ります。まずこの力を破らなければ、おお、南無大慈大悲の泥烏須如来（デウスにょらい）！　邪宗（じゃしゅう）に惑溺（わくでき）した日本人は波羅葦増（はらいそ）（天界（てんがい））の荘厳（しょうごん）を拝する事も、永久にないかも存じません。私はそのためにこの何日か、煩悶（はんもん）に煩悶を重ねて参りました。どうかあなたの下部（しもべ）、オルガンティノに、勇気と忍耐とを御授け下さい。——」

その時ふとオルガンティノは、鶏の鳴き声を聞いた

ように思った。が、それには注意もせず、さらにこう祈禱の言葉を続けた。

「私(わたくし)は使命を果すためには、この国の山川(やまかわ)に潜んでいる力と、——多分は人間に見えない霊と、戦わなければなりません。あなたは昔紅海(こうかい)の底に、埃及(エジプト)の軍勢(ぐんぜい)を御沈めになりました。この国の霊の力強い事は、埃及(エジプト)の軍勢に劣りますまい。どうか古(いにしえ)の予言者のように、私もこの霊との戦に、……」

祈禱の言葉はいつのまにか、彼の唇(くちびる)から消えてしまった。今度は突然祭壇のあたりに、けたたましい鶏鳴(けいめい)が聞えたのだった。オルガンティノは不審そうに、

彼の周囲を眺めまわした。すると彼の真後（まうしろ）には、白々（しろじろ）と尾を垂れた鶏が一羽、祭壇の上に胸を張ったまま、もう一度、夜でも明けたように鬨（とき）をつくっているではないか？

　オルガンティノは飛び上るが早いか、アビトの両腕を拡げながら、倉皇（そうこう）とこの鳥を逐い出そうとした。が、二足三足（ふたあしみあし）踏み出したと思うと、「御主（おんあるじ）」と、切れ切れに叫んだなり、茫然とそこへ立ちすくんでしまった。この薄暗い内陣（ないじん）の中には、いつどこからはいって来たか、無数の鶏が充満している、――それがあるいは空を飛んだり、あるいはそこここを駈けまわったり、ほ

とんど彼の眼に見える限りは、鶏冠（とさか）の海にしているのだった。

「御主、守らせ給え！」

彼はまた十字を切ろうとした。が、彼の手は不思議にも、万力（まんりき）か何かに挟（はさ）まれたように、一寸（いっすん）とは自由に動かなかった。その内にだんだん内陣（ないじん）の中には、榾火（ほたび）の明（あか）りに似た赤光（しゃっこう）が、どこからとも知れず流れ出した。オルガンティノは喘（あえ）ぎ喘ぎ、この光がさし始めると同時に、朦朧（もうろう）とあたりへ浮んで来た、人影があるのを発見した。

人影は見る間（ま）に鮮（あざや）かになった。それはいずれも見

慣れない、素朴な男女の一群だった。彼等は皆頸のまわりに、緒にぬいた玉を飾りながら、愉快そうに笑い興じていた。内陣に群がった無数の鶏は、彼等の姿がはっきりすると、今までよりは一層高らかに、何羽も鬨をつくり合った。同時に内陣の壁は、――サン・ミグエルの画を描いた壁は、霧のように夜へ呑まれてしまった。その跡には、――

日本の Bacchanalia は、呆気にとられたオルガンティノの前へ、蜃気楼のように漂って来た。彼は赤い篝の火影に、古代の服装をした日本人たちが、互いに酒を酌み交しながら、車座をつくっているのを見た。

そのまん中には女が一人、――日本ではまだ見た事のない、堂々とした体格の女が一人、大きな桶(おけ)を伏せた上に、踊り狂っているのを見た。桶の後ろには小山のように、これもまた逞(たくま)しい男が一人、根こぎにしたらしい榊(さかき)の枝に、玉だの鏡だのが下(さが)ったのを、悠然と押し立てているのを見た。彼等のまわりには数百の鶏が、尾羽根(おばね)や鶏冠(とさか)をすり合せながら、絶えず嬉しそうに鳴いているのを見た。そのまた向うには、――オルガンティノは、今更のように、彼の眼を疑わずにはいられなかった。――そのまた向うには夜霧の中に、岩屋(いわや)の戸らしい一枚岩が、どっしりと聳えているのだった。

桶の上にのった女は、いつまでも踊をやめなかった。彼女の髪を巻いた蔓（つる）は、ひらひらと空に翻（ひるがえ）った。彼女の頸に垂れた玉は、何度も霰（あられ）のように響き合った。彼女の手にとった小笹の枝は、縦横に風を打ちまわった。しかもその露（あら）わにした胸！　赤い篝火（かがりび）の光の中に、艶々（つやつや）と浮（うか）び出た二つの乳房（ちぶさ）は、ほとんどオルガンティノの眼には、情欲そのものとしか思われなかった。彼は泥烏須（デウス）を念じながら、一心に顔をそむけようとした。が、やはり彼の体は、どう云う神秘な呪（のろい）の力か、身動きさえ楽には出来なかった。

その内に突然沈黙が、幻の男女たちの上へ降った。

桶の上に乗った女も、もう一度正気（しょうき）に返ったように、やっと狂わしい踊をやめた。いや、鳴き競っていた鶏さえ、この瞬間は頸を伸ばしたまま、一度にひっそりとなってしまった。するとその沈黙の中に、永久に美しい女の声が、どこからか厳かに伝わって来た。

「私（わたし）がここに隠（こも）っていれば、世界は暗闇になった筈ではないか？　それを神々は楽しそうに、笑い興じていると見える。」

　その声が夜空に消えた時、桶の上にのった女は、ちらりと一同を見渡しながら、意外なほどしとやかに返事をした。

「それはあなたにも立ち勝（まさ）った、新しい神がおられますから、喜び合っておるのでございます。」

その新しい神と云うのは、泥烏須（デウス）を指しているのかも知れない。――オルガンティノはちょいとの間（あいだ）、そう云う気もちに励まされながら、この怪しい幻の変化に、やや興味のある目を注いだ。

沈黙はしばらく破れなかった。が、たちまち鶏の群（むれ）が、一斉（いっせい）に鬨（とき）をつくったと思うと、向うに夜霧を堰（せ）き止めていた、岩屋の戸らしい一枚岩が、徐（おもむ）ろに左右へ開（ひら）き出した。そうしてその裂（さ）け目からは、言句（ごんく）に絶した万道（ばんどう）の霞光（かこう）が、洪水のように漲（みなぎ）り出した。

オルガンティノは叫ぼうとした。が、舌は動かなかった。オルガンティノは逃げようとした。が、足も動かなかった。彼はただ大光明のために、烈しく眩暈(めまい)が起るのを感じた。そうしてその光の中に、大勢(おおぜい)の男女の歓喜する声が、澎湃(ほうはい)と天に昇(のぼ)るのを聞いた。

「大日孁貴(おおひるめむち)！　大日孁貴！　大日孁貴！」

「新しい神なぞはおりません。新しい神なぞはおりません。」

「あなたに逆(さか)うものは亡びます。」

「御覧なさい。闇が消え失せるのを。」

「見渡す限り、あなたの山、あなたの森、あなたの川、

あなたの町、あなたの海です。」

「新しい神なぞはおりません。誰も皆あなたの召使です。」

「大日孁貴！　大日孁貴！　大日孁貴！」

そう云う声の湧き上る中に、冷汗になったオルガンティノは、何か苦しそうに叫んだきりとうとうそこへ倒れてしまった。……

その夜も三更に近づいた頃、オルガンティノは失心の底から、やっと意識を恢復した。彼の耳には神々の声が、未だに鳴り響いているようだった。が、あたりを見廻すと、人音も聞えない内陣には、円天井のラン

プの光が、さっきの通り朦朧と壁画を照らしているばかりだった。オルガンティノは呻き呻き、そろそろ祭壇の後を離れた。あの幻にどんな意味があるか、それは彼にはのみこめなかった。しかしあの幻を見せたものが、泥烏須でない事だけは確かだった。

「この国の霊と戦うのは、……」

オルガンティノは歩きながら、思わずそっと独り語を洩らした。

「この国の霊と戦うのは、思ったよりもっと困難らしい。勝つか、それともまた負けるか、——」

するとその時彼の耳に、こう云う囁きを送るもの

があった。

「負けですよ！」

オルガンティノは気味悪そうに、声のした方を透(す)かして見た。が、そこには不相変(あいかわらず)、仄暗(ほのぐら)い薔薇や金雀花(えにしだ)のほかに、人影らしいものも見えなかった。

× × ×

オルガンティノは翌日の夕(ゆうべ)も、南蛮寺(なんばんじ)の庭を歩いていた。しかし彼の碧眼(へきがん)には、どこか嬉しそうな色が

あった。それは今日一日(いちにち)の内に、日本の侍が三四人、奉教人(ほうきょうにん)の列にはいったからだった。

庭の橄欖(かんらん)や月桂(げっけい)は、ひっそりと夕闇に聳えていた。ただその沈黙が擾(みだ)されるのは、寺の鳩(はと)が軒へ帰るらしい、中空(なかぞら)の羽音(はおと)よりほかはなかった。薔薇の匂(におい)、砂の湿り、——一切は翼のある天使たちが、「人の女子(おみなご)の美しきを見て、」妻を求めに降(くだ)って来た、古代の日の暮のように平和だった。

「やはり十字架の御威光の前には、穢(けが)らわしい日本の霊の力も、勝利を占(し)める事はむずかしいと見える。しかし昨夜(ゆうべ)見た幻は?——いや、あれは幻に過ぎない。

悪魔はアントニオ上人にも、ああ云う幻を見せたではないか？　その証拠には今日になると、一度に何人かの信徒さえ出来た。やがてはこの国も至る所に、天主の御寺が建てられるであろう。」

オルガンティノはそう思いながら、砂の赤い小径を歩いて行った。すると誰か後から、そっと肩を打つものがあった。彼はすぐに振り返った。しかし後には夕明りが、径を挟んだ篠懸の若葉に、うっすりと漂っているだけだった。

「御主。守らせ給え！」

彼はこう呟いてから、徐ろに頭をもとへ返した。

と、彼の傍にはいつのまにそこへ忍び寄ったか、昨夜の幻に見えた通り、頸に玉を巻いた老人が一人、ぼんやり姿を煙らせたまま、徐ろに歩みを運んでいた。

「誰だ、お前は？」

不意を打たれたオルガンティノは、思わずそこへ立ち止まった。

「私は、――誰でもかまいません。この国の霊の一人です。」

老人は微笑を浮べながら、親切そうに返事をした。

「まあ、御一緒に歩きましょう。私はあなたとしばらくの間、御話しするために出て来たのです。」

オルガンティノは十字を切った。が、老人はその印（しるし）に、少しも恐怖を示さなかった。

「私は悪魔ではないのです。御覧なさい、この玉やこの剣を。地獄（じごく）の炎（ほのお）に焼かれた物なら、こんなに清浄ではいない筈です。さあ、もう呪文（じゅもん）なぞを唱えるのはおやめなさい。」

オルガンティノはやむを得ず、不愉快そうに腕組をしたまま、老人と一しょに歩き出した。

「あなたは天主教（てんしゅきょう）を弘（ひろ）めに来ていますね、――」

老人は静かに話し出した。

「それも悪い事ではないかも知れません。しかし

泥烏須(デウス)もこの国へ来ては、きっと最後には負けてしまいますよ。」

「泥烏須(デウス)は全能の御主(おんあるじ)だから、泥烏須に、――」

オルガンティノはこう云いかけてから、ふと思いついたように、いつもこの国の信徒に対する、叮嚀(ていねい)な口調を使い出した。

「泥烏須(デウス)に勝つものはない筈です。」

「ところが実際はあるのです。まあ、御聞きなさい。はるばるこの国へ渡って来たのは、泥烏須(デウス)ばかりではありません。孔子(こうし)、孟子(もうし)、荘子(そうし)、――そのほか支那からは哲人たちが、何人もこの国へ渡って来ました。し

かも当時はこの国が、まだ生まれたばかりだったのです。支那の哲人たちは道のほかにも、呉の国の絹だの秦の国の玉だの、いろいろな物を持って来ました。いや、そう云う宝よりも尊い、霊妙な文字さえ持って来たのです。が、支那はそのために、我々を征服出来たでしょうか？　たとえば文字を御覧なさい。文字は我々を征服する代りに、我々のために征服されました。私が昔知っていた土人に、柿の本の人麻呂と云う詩人があります。その男の作った七夕の歌は、今でもこの国に残っていますが、あれを読んで御覧なさい。牽牛織女はあの中に見出す事は出来ません。あそこ

に歌われた恋人同士は飽くまでも彦星と棚機津女とです。彼等の枕に響いたのは、ちょうどこの国の川のように、清い天の川の瀬音でした。支那の黄河や揚子江に似た、銀河の浪音ではなかったのです。しかし私は歌の事より、文字の事を話さなければなりません。人麻呂はあの歌を記すために、支那の文字を使いました。が、それは意味のためより、発音のための文字だったのです。舟と云う文字がはいった後も、「ふね」は常に「ふね」だったのです。さもなければ我々の言葉は、支那語になっていたかも知れません。これは勿論人麻呂よりも、人麻呂の心を守っていた、我々この国の神

の力です。のみならず支那の哲人たちは、書道をもこの国に伝えました。空海、道風、佐理、行成——私は彼等のいる所に、いつも人知れず行っていました。彼等が手本にしていたのは、皆支那人の墨蹟です。しかし彼等の筆先からは、次第に新しい美が生れました。彼等の文字はいつのまにか、王羲之でもなければ褚遂良でもない、日本人の文字になり出したのです。しかし我々が勝ったのは、文字ばかりではありません。我々の息吹きは潮風のように、老儒の道さえも和げました。この国の土人に尋ねて御覧なさい。彼等は皆孟子の著書は、我々の怒に触れ易いために、それを積

んだ船があれば、必ず覆（くつがえ）ると信じています。科戸（しなと）の神はまだ一度も、そんな悪戯（いたずら）はしていません。が、そう云う信仰の中（うち）にも、この国に住んでいる我々の力は、朧（おぼろ）げながら感じられる筈です。あなたはそう思いませんか？」

　オルガンティノは茫然と、老人の顔を眺め返した。この国の歴史に疎（うと）い彼には、折角（せっかく）の相手の雄弁も、半分はわからずにしまったのだった。

「支那の哲人たちの後（のち）に来たのは、印度（インド）の王子悉達多（したあるた）です。――」

　老人は言葉を続けながら、径（みち）ばたの薔薇（ばら）の花をむし

ると、嬉しそうにその匂を嗅（か）いだ。が、薔薇はむしられた跡にも、ちゃんとその花が残っていた。ただ老人の手にある花は色や形は同じに見えても、どこか霧のように煙っていた。

「仏陀（ぶつだ）の運命も同様です。が、こんな事を一々御話しするのは、御退屈を増すだけかも知れません。ただ気をつけて頂きたいのは、本地垂跡（ほんじすいじゃく）の教の事です。あの教はこの国の土人に、大日孁貴（おおひるめむち）は大日如来（だいにちにょらい）と同じものだと思わせました。これは大日孁貴の勝でしょうか？　それとも大日如来の勝でしょうか？　仮りに現在この国の土人に、大日孁貴は知らないにしても、大日如来

は知っているものが、大勢あるとして御覧なさい。それでも彼等の夢に見える、大日如来の姿の中には、印度仏の面影よりも、大日孁貴が窺われはしないでしょうか？　私は親鸞や日蓮と一しょに、沙羅双樹の花の陰も歩いています。彼等が随喜渇仰した仏は、円光のある黒人ではありません。優しい威厳に充ち満ちた上宮太子などの兄弟です。――が、そんな事を長々と御話しするのは、御約束の通りやめにしましょう。つまり私が申上げたいのは、泥烏須のようにこの国に来ても、勝つものはないと云う事なのです。」

「まあ、御待ちなさい。御前さんはそう云われるが、

――」

オルガンティノは口を挟（はさ）んだ。

「今日などは侍が二三人、一度に御教（おんおしえ）に帰依（きえ）しましたよ。」

「それは何人（なんにん）でも帰依するでしょう。ただ帰依したと云う事だけならば、この国の土人は大部分悉達多（したあるた）の教えに帰依しています。しかし我々の力と云うのは、破壊する力ではありません。造り変える力なのです。」

老人は薔薇の花を投げた。花は手を離れたと思うと、たちまち夕明りに消えてしまった。

「なるほど造り変える力ですか？　しかしそれはお前

さんたちに、限った事ではないでしょう。どこの国でも、――たとえば希臘（ギリシャ）の神々と云われた、あの国にいる悪魔でも、――」

「大いなるパンは死にました。いや、パンもいつかはまたよみ返るかも知れません。しかし我々はこの通り、未だに生きているのです。」

オルガンティノは珍しそうに、老人の顔へ横眼を使った。

「お前さんはパンを知っているのですか？」

「何、西国（さいこく）の大名の子たちが、西洋から持って帰ったと云う、横文字（よこもじ）の本にあったのです。――それも今の

話ですが、たといこの造り変える力が、我々だけに限らないでも、やはり油断はなりませんよ。いや、むしろ、それだけに、御気をつけなさいと云いたいのです。我々は古い神ですからね。あの希臘（ギリシャ）の神々のように、世界の夜明けを見た神ですからね。」

「しかし泥烏須（デウス）は勝つ筈です。」

オルガンティノは剛情に、もう一度同じ事を云い放った。が、老人はそれが聞えないように、こうゆっくり話し続けた。

「私（わたし）はつい四五日前（まえ）、西国（さいこく）の海辺（うみべ）に上陸した、希臘（ギリシャ）の船乗りに遇（あ）いました。その男は神ではありません。た

だの人間に過ぎないのです。私はその船乗と、月夜の岩の上に坐りながら、いろいろの話を聞いて来ました。目一つの神につかまった話だの、人を豕（いのこ）にする女神（めがみ）の話だの、声の美しい人魚（にんぎょ）の話だの、――あなたはその男の名を知っていますか？　その男は私に遇（あ）った時から、この国の土人に変りました。今では百合若（ゆりわか）と名乗っているそうです。ですからあなたも御気をつけなさい。泥烏須（デウス）も必ず勝つとは云われません。天主教（てんしゅきょう）はいくら弘（ひろ）まっても、必ず勝つとは云われません。」

老人はだんだん小声になった。

「事によると泥烏須（デウス）自身も、この国の土人に変るで

しょう。支那や印度も変ったのです。西洋も変らなければなりません。我々は木々の中にもいます。浅い水の流れにもいます。薔薇(ばら)の花を渡る風にもいます。寺の壁に残る夕明り(ゆうあか)にもいます。どこにでも、またいつでもいます。御気をつけなさい。御気をつけなさい。……」

その声がとうとう絶えたと思うと、老人の姿も夕闇の中へ、影が消えるように消えてしまった。と同時に寺の塔からは、眉をひそめたオルガンティノの上へ、アヴェ・マリアの鐘が響き始めた。

×　　×　　×

南蛮寺（なんばんじ）のパアドレ・オルガンティノは、——いや、オルガンティノに限った事ではない。悠々とアビトの裾（すそ）を引いた、鼻の高い紅毛人（こうもうじん）は、黄昏（たそがれ）の光の漂（ただよ）った、架空（かくう）の月桂（げっけい）や薔薇の中から、一双の屏風（びょうぶ）へ帰って行った。南蛮船入津（なんばんせんにゅうしん）の図を描（か）いた、三世紀以前の古屏風へ。

さようなら。パアドレ・オルガンティノ！　君は今君の仲間と、日本の海辺（うみべ）を歩きながら、金泥（きんでい）の霞に旗を挙げた、大きい南蛮船を眺めている。泥烏須（デウス）が勝つ

か、大日孁貴が勝つか——それはまだ現在でも、容易に断定は出来ないかも知れない。が、やがては我々の事業が、断定を与うべき問題である。君はその過去の海辺から、静かに我々を見てい給え。たとい君は同じ屏風の、犬を曳いた甲比丹や、日傘をさしかけた黒ん坊の子供と、忘却の眠に沈んでいても、新たに水平へ現れた、我々の黒船の石火矢の音は、必ず古めかしい君等の夢を破る時があるに違いない。それまでは、——さようなら。パアドレ・オルガンティノ！　さようなら。南蛮寺のウルガン伴天連！

（大正十年十二月）

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年１月27日第１刷発行
１９９３（平成５）年12月25日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月19日公開
２００４年３月10日修正